新潟県教育界における「学閥」問題（第十九回）

にいがた県民教育研究所「学閥」研究会

第九章　新潟県教育界における権力の所在とその行使
―教育委員会は「空洞」、権力は私的な「派閥連合システム」が完全掌握―

新潟県の公教育における「権力」は法にもとづけば教育委員会にあることになっており、また教育委員会は憲法と教育基本法にもとづいて公正にそれを行使すべきである。ところが実際には私的な集団（ヤミ団体）である「派閥」が教育委員会をも支配し、各学校の管理職人事を一〇〇％支配し、さらに教職員組合人事までも支配している。したがって新潟県の公教育における権力は実質的には「派閥」に集中し、「派閥」が教育行政から組合にいたるまで統括的にその権力を行使している。各「派閥」はこれらの人事を「指定席」化することによって、他の「派閥」の干渉を受けない、相互に独立した人事権領域（テリトリー＝「指定席」群）を確立し、新潟県の公教育の人事権を分割支配している。したがって、新潟県教育界における権力は各「派閥」にあり、全体としては各「派閥」の総体としての「派閥連合」に権力が存在するというシステムを構成している。しかも「派閥」はヤミ団体であるために、校長や教頭、それに管理主事や指導主事の人事において、どのような人事をおこなおうとも、それは「派閥」の「内部問題」

であって、公式にはその責任を問われることがないのである。「ヤミ団体」による不正な公教育支配と教育委員会の無責任体制が放置されていることは新潟県の教育界におけるもっとも際立った特質である。

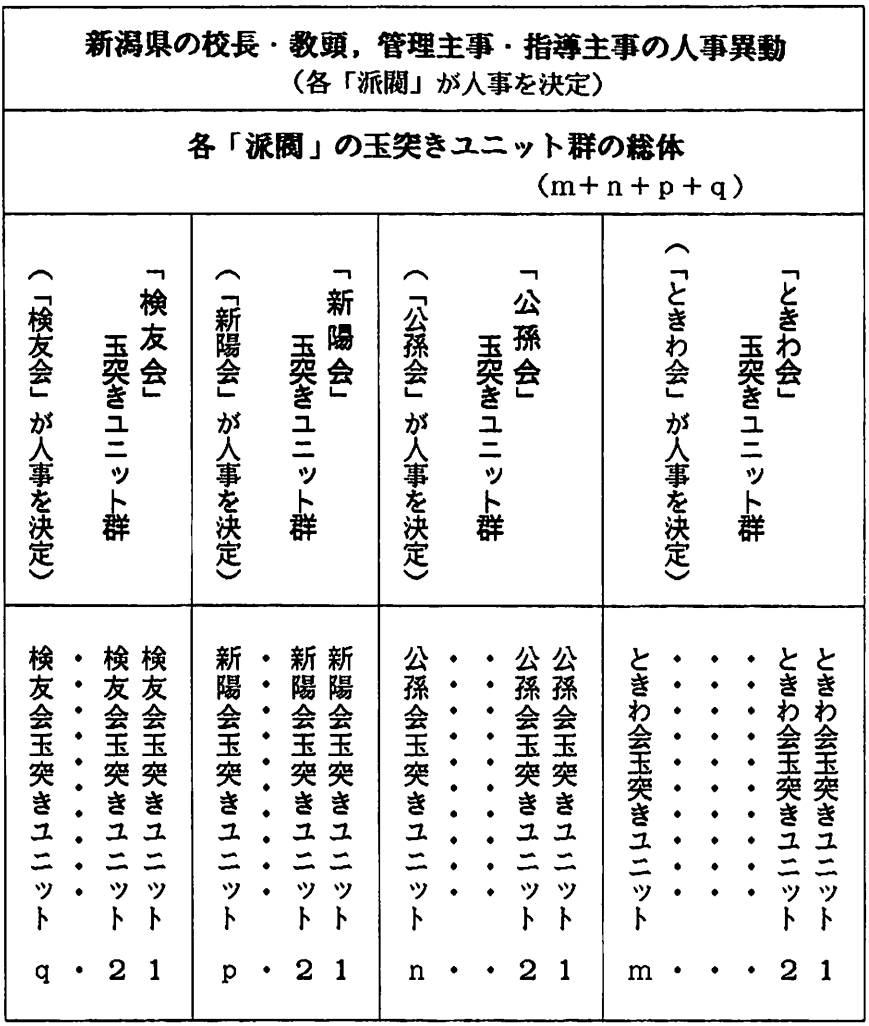
今回は一九九一年の人事異動を分析しながらこれらのヤミ権力のカラクリを具体的に明らかにする。まず最初に管理職人事や教育委員会の人事を決定しているのは教育委員会ではなく、各「派閥」であることを明らかにし、そのヤミ権力が各「派閥」の玉突き人事異動によって行使されていることを明らかにする。つづいて女性管理職の人事もこのカラクリに組み込まれていることを明らかにし、「女教員会」の果たしている「歴史的」役割を明らかにする。最後に「派閥」から推薦された新教組本部役員がその役職を退いた後、「派閥」の一員としてどのように遇されているか、その一端を明らかにする。

1、新潟県の管理職人事と教育行政職人事異動は「派閥」の「玉突きユニット」の集合体

―一九九一年の「新陽会」の異動にみる「派閥」の公教育支配の構造（カラクリ）―

今春も校長や教頭、それに管理主事や指導主事など多くの人事異動が行われ、新聞紙上をにぎわした。このような異動の発表には所属「派閥」が記されていないので、人事異動がどのような構造（カラクリ）になっているかが隠されているが、実はこれらの管理職および教育行政職の異動はすべて各「派閥」の玉突き人事異動の集合体である。個々の玉突き人事異動の系列を「玉突きユニット」と呼ぶことにすると、これらの人事異動は第1図に示すように「ときわ会」の玉突きユニット群、「公孫会」の玉突きユニット群、「新陽会」の玉突きユニット群、それに「検友会」の玉突きユニット群に分解できる。このことは、新潟県においては管理職人事や教育行政職人事はすべて「派閥」が「超権力」的に一括支配していることを事実でもって示している。このことをまず、一九九一年の「新陽会」の玉突きユニット群について具体的に見てみよう。

「新陽会」の人事異動は第1表に示すように11の玉突きユニットに分解でき、それらが一九九一年度の「新陽会」玉突きユニット群を構成している。これらはすべて「派閥」の「指定席」を使って行われている。これらのうち、ユニット1からユニット8までは「新陽会校長」の退職にともなう「派閥」人事であり、ユニット9は「新陽会教頭」の退職にともなう「派閥」人事である。ユニット10は「新陽会校長」を循環させた「派閥」人事であり、ユニット11は「新陽会指導主事」と「新陽会教頭」を入れ替えた「派閥」人事である。これらの11の玉突きユニット群を構成する人



第1図　新潟県の校長，教頭，管理主事，指導主事の人事の決定のしくみ（カラクリ）。これらのすべての人事は「派閥」が決定する「派閥人事」である。教育委員会は空洞である。

第１表　「新陽会」１９９１年の管理職異動を構成する１１の玉突きユニット（＊印は「新陽会指定席」を示す）

ユニット１；　退職←＊新潟・宮浦中校長（桑原藤八）←＊長岡・東中校長（広川正昭）←＊県教委義務教育課管理主事（寺崎孝由）←＊県教委下越教育事務所管理主事（桜井寿夫）←＊新潟・赤塚中校長（森智温）←＊豊栄・岡方中校長（昇任）（島田重義）←＊十日町・中条中教頭←＊中魚・上郷中教頭（昇任）←長岡・宮内中教諭

ユニット２；　退職←＊新津・第一中校長（井上　弘）←＊村上・岩船中校長（大平寅雄）←＊県教委義務教育課指導主事（上野實英）←＊西頸・名立中校長（山本　昭）←＊新潟県少年自然の家指導課長（上田勝彦）←＊県教委下越教育事務所社会教育課社会教育主事（八木幸一郎）←＊糸魚川・姫川中教頭（昇任）←三島・出雲崎中教諭

ユニット３；　退職←＊新潟・曽野木中校長（反町幸男）←＊三条・第二中校長（鴨井三郎）←＊新発田・猿橋中校長（片岡幸夫）←＊北蒲・安田中校長（鈴木友夫）←＊岩船・神納東小校長（昇任）（松永康夫）←東頸・船倉小教頭（昇任）←東頸・松里小教諭

ユニット４；　退職←＊新潟・石山中校長（薄田　富）←＊五泉・北中校長（鷲津秀郎）←＊佐渡・相川中校長（昇任）（肥田直孝）←＊白根・臼井中教頭（昇任）←新津・第二中教諭

ユニット５；　退職←＊新津・金津中校長（横山精一）←＊新潟・大江山中校長（長谷川洋一）←＊北蒲・京ケ瀬中校長（昇任）（鈴木勝美）←＊新潟・寄居中教頭←＊西蒲・巻西中教頭←新津・第三中教頭（昇任）←北蒲・築地中教諭

第 1 表つづき

ユニット6；　退職←＊長岡・宮内中校長（渋谷　孜）←＊柏崎・第二中校長（山井宥昌）←＊両津・北中校長（昇任）（原　義弘）←＊新潟・坂井輪中教頭←＊両津・水津中教頭←＊新潟県立教育センター科学教育課指導主事←＊長岡・栖吉中教頭←南蒲・下田中教頭（昇任）←西蒲・巻西中教諭

ユニット7；　退職←＊長岡・北中校長（本間和夫）←＊加茂・加茂中校長（武石佐武郎）←西蒲・月潟中校長（小林圭次）←＊三条・大島小校長（昇任）（長谷川春夫）←＊柏崎・中通中教頭（昇任）←西頸・能生中教諭

ユニット8；　退職←＊佐渡・佐和田中校長（坂下清美）←＊佐渡・真野中校長（昇任）（斎藤史郎）←＊北蒲・中条中教頭←＊栃尾・入東小教頭（昇任）←上越・和田小教諭

ユニット9；　退職←＊長岡・青葉台中教頭←＊新潟県立教育センター学校経営課指導主事←＊新潟・関屋中教頭←＊西蒲・潟東中教頭（昇任）←新潟・下山中教諭

ユニット10；　（＊白根・新飯田中校長に循環）←＊長岡・栖吉中校長（木戸貞男）←＊南魚・城内中校長（雲尾春男）←＊北魚・小出中校長（浅賀敏男）←＊白根・新飯田中校長（細貝昭平）

ユニット11；　（＊県教委下越教育事務所指導主事と交換）←＊村上・上海府中教頭←＊県教委下越教育事務所指導主事

事異動については教育委員会には何のかかわりもなく、「新陽会」が独自の「裁量」でその人事を行える構造（カラクリ）になっている。この事情は他の「派閥」の玉突きユニット群についても同様であるから、結局その総体として新潟県の校長や教頭、それに管理主事、指導主事などの人事においては教育委員会には何の実質的な権限もなく、すべて「派閥」がテリトリー（「指定席」群）を完全分割しながらそれぞれに好きなように行っているのである。

もう一度、「新陽会」玉突きユニットの中身（第1表）をみると、ユニット1には県教委義務教育課管理主事と下越教育事務所管理主事の2名の管理主事が含まれ、玉突き人事異動をしている。公正な人事異動を行うことに社会的責任をもつはずの管理主事自身も「派閥」の兵隊に過ぎないのである。ユニット2にみられる指導主事や社会教育主事の人事についても、またユニット6やユニット9にみられる県立教育センターの人事についても同様である。彼らは「派閥」のしがらみの中で仕事をしているのであって、このような精神状態の「指導主事」の「学校訪問」などは迷惑がられることはあっても、ものの役にたたないことは理の当然である。

2、校長や教頭は「派閥」が勝手に勝手に決めている
―「ときわ会」、「公孫会」、「検友会」それぞれの玉突き人事異動ユニット―

つぎに一九九一年の異動について、「ときわ会」、「公孫会」、「検友会」のそれぞれの「玉突きユニット」の例を見てみよう。

a、「ときわ会」の玉突きユニット

「ときわ会」の一九九一年の玉突きユニット群のうち、4例を第2表に示した。ユニット例1は県教委下越教育事務所の所長や指導主事と国立学校である新潟大学教育学部附属学校の副校長のポストとが「ときわ会」の「派閥」人事として玉突きユニットを形成している例である。ユニット例2は養護学校関係の管理職と新潟県学校生活協同組合の理事とが「ときわ会」の玉突きユニットを形成してる例である。ユニット例3やユニット例4は「ときわ会」の「指定席」にされている新潟大学教育学部の附属学校の教頭が同じく「ときわ会」の「指定席」を利用して校長に昇任した「派閥」人事の例である。ちなみに上越市立和田小学校の校長ポストは上越市内における「ときわ会」唯一の「指定席」である。これらの人事はすべて公教育行政の問題ではなくて、「ときわ会」の「内部問題」である。

第2表　管理職異動における「ときわ会」の玉突きユニットの例
（1991年）（○印は「ときわ会」の「指定席」を示す）

ユニット例1；　退職←○新潟・白山小校長（笹井智夫）←○県教委下越教育事務所長（水沢　潔）←○新潟大学教育学部附属新潟小学校副校長（金子紀久夫）←○県教委下越教育事務所佐渡出張所指導主事（高橋二郎）←○佐渡・西三川小校長（大津隆一）←○県教委下越教育事務所学校指導課指導主事（畑山政和）←○新発田・御免町小教頭（昇任）←村上・村上南小教諭

ユニット例2；　退職←○新潟市立養護学校校長（稲庭　實）←○新潟大学教育学部附属養護学校副校長（室橋松雄）←○北蒲・鼓岡小校長（熊倉唯夫）←○新潟県学校生活協同組合本部理事（木村藤一）←○見附・上北谷小教頭←○長岡・下川西小教頭←○中魚・白倉小教頭（昇任）←西蒲・月潟小教諭

ユニット例3；　退職←○新津・小合小校長（川島泰郎）←○白根・大鷲中校長（昇任）（西埜　洋）←○新潟大学教育学部附属新潟中教頭（金子　博）←○新発田・佐々木中教頭（昇任）←新潟・内野中教諭

ユニット例4；　退職←○長岡・千手小校長（石橋定雄）←○見附・南中校長（大枝隆俊）←○上越・和田小校長（昇任）（大橋岑生）←○新潟大学教育学部附属長岡小教頭（坂田賢資）←○加茂・七谷小教頭←○県教委文化行政課文化財主事←北蒲・中条小教諭

b、「公孫会」の玉突きユニット

「公孫会」の玉突きユニット群のうち8例を第3表に示した。ユニット例1は一九九一年の「公孫会」の玉突き人事異動ユニットのうちで最も重要なユニットで、公教育の場における「公孫会」のエージェント（「公孫会」管理主事）の異動系列を示している。これは県教委義務教育課の「公孫会」課長の転出にともない、「公孫会」管理主事が忍者のように次々に繰り上がってくる系列である。ユニット例2～例4は「公孫会」の「指定席」を利用した「派閥」人事の系列で、特にユニット例4では柏崎市から新潟市、新発田市、さらに新潟県最北端の岩船郡山北町にまでまたがっている。日頃関係もない遠くの町や村から突如校長や教頭が赴任してくるのは「派閥」人事と思ってまちがいない。ユニット例5は長岡市内での「公孫会」中学校長の異動における「派閥」人事の例で、ユニット例6は新潟大学教育学部附属学校管理職のうち、唯一「公孫会」の「指定席」にされている附属長岡中学校副校長の転出にともなう「派閥」人事であり、ユニット例7は同じく「公孫会」の「指定席」にされている上越教育大学附属中学校の教頭の昇任を含む「派閥」人事である。ユニット例8は同じく「公孫会」の「指定席」にされている糸魚川市学校教育課長の転出を含む「派閥」人事である。

第3表　管理職異動における「公孫会」の玉突きユニットの例
（1991年）（●印は「公孫会」の「指定席」を示す）

ユニット例1；　退職←●長岡・表町小校長（渡部陸平）←●県教委義務教育課（課長、参事）（水野文俊）（課長、参事は「ときわ会」との輪番制）←●県教委義務教育課管理主事（加藤淳一）←●県教委中越教育事務所管理主事（後藤亮一）←●県教委上越教育事務所管理主事（小林　実）←●三島・桐島小校長（昇任）（藤田　剛）←●新井・猿橋小教頭（昇任）←上越・直江津東小教諭

ユニット例2；　退職←●西蒲・弥彦小校長（佐藤和男）←●県教委下越教育事務所管理主事（諸川重俊）←●新潟・木山小校長（昇任）（加藤善八）←●長岡・富曾亀小教頭←●長岡・才津小教頭（昇任）←小千谷・東小千谷小教諭

第３表つづき

ユニット例３；　退職←●新潟・山の下中校長（市橋文夫）←●新潟・五十嵐中校長（高梨和夫）←●豊栄・木崎中校長（清田　勲）←●新津・結小校長（丸山真哉）←●西蒲・吉田北小校長（昇任)(林　昇）←●長岡・四郎丸小教頭←長岡・表町小教諭

ユニット例４；　退職←●新潟・山の下小校長（菊池哲三郎）←●新潟・鳥屋野小校長（朝川　浩）←●柏崎・高浜小校長（佐藤騏四郎）←●岩船・桑川小校長（昇任）（淡路　勲）←●新発田・松浦小教頭（昇任）←柏崎・比角小教諭

ユニット例５；　退職←●長岡・東北中校長（上杉貞昭）←●長岡・西中校長（林　勇次郎）←●中魚・中里中校長（金子三郎）←●県教委上越教育事務所指導主事（渡辺勝也）←●柏崎・鵜川中校長（柏崎南中に統合）

ユニット例６；　退職←●上越・春日小校長（丸山祐二）←●三島・越路中校長（箕輪正明）←●新潟大学教育学部附属長岡中副校長（大富昌司）←●柏崎・城北中校長（柏崎南中に統合）

ユニット例７；　退職←●中頸・針小校長（伊藤孝宏）←●十日町・吉田中校長（昇任）（佐藤義隆）←●上越教育大学附属中学校教頭（木澤敏明）←●新井・新井中教頭（昇任）←上越・直江津東中教諭

ユニット例８；　退職←●上越・南本町小校長（百目鬼信三）←●中頸・関山小校長（小林幸夫）←●糸魚川市教委学校教育課長（若月昇）←●刈羽・高柳中校長（昇任）（横関健一）←●刈羽・西山中教頭（昇任）←三島・塚山中教諭

第4表　「検友会」における玉突き人事異動の例　（１９９１年）
（（ ）内はへき地級および1991年度の学級数を示す）
（△印は「検友会」の「指定席」を示す）

ユニット例1；　退職←△三島・与板中（10）校長（朝賀脩栄）←△十日町市教委地区担当指導主事（熊木勝久）←△中魚・津南原小（４）（へ1)校長（昇任）（江口和宏）←△西蒲・中之口西小（12）教頭←△小千谷・塩谷小（３)(へ1)教頭（昇任）←上越・国府小教諭

ユニット例2；　退職←△新潟・西内野小（19）校長（田中秀夫）←△白根・新飯田小（６）校長（昇任）（中林芳雄）←△新潟・坂井輪小（29）教頭←△栃尾・比礼小（３)(へ1)教頭（昇任）←新潟・濁川小教諭

ユニット例3；　退職←△新潟・濁川小（19）校長（諸橋好二）←△新津・満日小（６）校長（佐藤満寿夫）←△五泉・馬下小（６）校長（岩野岩雄）←△中蒲・戸倉小（準へ）校長（廃校）

ユニット例4；　退職←△小千谷・南中（７）校長（昇任)(解良亮一）←△西蒲・分水北小（12）教頭←△岩船・沼小（３）（へ１）教頭（昇任）←北蒲・山手小教諭

ユニット例5；　退職←△岩船・砂山小（８）校長（前田喜春）←△南蒲・栄北小（10）校長（昇任）（上原俊雄）←△三条・旭小（６）教頭←△南蒲・早水小（４)(へ２）教頭（昇任）←加茂・南小教諭

ユニット例6；　退職←△中頸・寺野小（３)(準へ）校長（高橋則時）←△南魚・後山小（３)(へ２）校長（昇任）（富所和彦）←△糸魚川・山之坊小（３)(へ１）教頭←（「公孫会」に交替）

c、「検友会」の玉突きユニット

「検友会」の玉突きユニット群のうち、6例を第4表に示した。「検友会」の管理職「指定席」には僻地校や小規模校が多い（本連載第十二回参照）ので、第4表には学校の総学級数やへき地級を参考までに示した。「検友会」の「派閥」人事にあっては県内各地に散在するこのような学校（「指定席」）を巡って、単身赴任など人間らしい生活を犠牲にしてまでも広域異動が行われていることが、例に示した「検友会」の玉突きユニットからもうかがえる。

ユニット例1は新潟県内における「検友会」の唯一の指導主事「指定席」である十日町市教育委員会指導主事の閥的異動を含んだ玉突きユニットである。ユニット例2は新潟市を、ユニット例3は二市・中蒲原郡地域を中心とした「検友会」の「派閥」人事である。ユニット例4とユニット例5は中越地域から岩船郡にわたる広域的「派閥」人事の例である。ユニット例6は上越地方を中心とした「派閥」人事の例である。

2、「派閥」の玉突きユニットに組み込まれた女性管理職

―「派閥」支配を容認し、屈従する「女教員会」―

さて、以上のような「派閥」の玉突きユニット群から構成されている新潟県の人事異動のカラクリの中で、それからはみ出ているはずの女性管理職の異動はどのような仕組みで行われているのであろうか。それは本連載第十三回で明らかにしたように「ときわ会」や「公孫会」の「貸席」として女性管理職のポストはこれらの「派閥」の玉突きユニットに組み込まれているのである。「女教員会」幹部は自分が管理職になることと引き替えに、「派閥」支配を容認し、それに屈従してきた。

第5表に一九九一年度における女性管理職の一覧を示した。女性校長は十五名、女性教頭は十三名である。これを「貸席元」でみると、校長は「ときわ会」が八席で「公孫会」が七席であり、教頭は「ときわ会」と「公孫会」がともに六席で、一九九一年度より「検友会」が新たに一席を「女教員会」に貸すことになった。

さて女性校長・教頭の総数と「貸席元」別の数の一九八七年から一九九一年の間における推移を第6表に示した。この間、女性管理職の総数はわずかに増加しているが、それには「貸席元」の「派閥」の間で微妙な調整が行われていることが第6表から読み取れる。すなわち、一九八八年には「ときわ会」が校長の「貸席」を、一九九〇年には「公孫会」が教頭の「貸席」を、一九九一年には「ときわ会」が校長の「貸席」をと交互にそれぞれ一席だけ「貸席」を増やした。あわせて一九九一年度には「検友会」が新たに教頭を一席、「貸席」とした。これは「ときわ会」と

第5表　　新潟県の女性校長・教頭一覧（１９９１年）

	学　校　名　（氏　名）	年齢	学級数	へき地級	貸 席 元
校長　1	新潟市・入船小（浜田裕子）	59	18		ときわ会
2	新潟市・笠木小（鍋谷総子）	54	6		ときわ会
3	長岡市・十日町小（小川女子）	54	6		ときわ会
4	村上市・吉浦小（尾崎絹子）	54	6		ときわ会
5	北蒲中条・大出小（小柳　清）	58	7		公 孫 会
6	東蒲三川・下条小（寺尾勝子）	53	6		ときわ会
7	東蒲鹿瀬・日出谷小（高瀬詩子）	52	6	準へ	ときわ会
8	西蒲黒崎・黒鳥小（丸山喜美）	50	6		公 孫 会
9	西蒲・潟東西小（小野庸子）	54	6		ときわ会
10	三条市・上林小（馬場道子）	57	7		ときわ会
11	見附市・新潟小（堀江順子）	56	6		公 孫 会
12	北魚・東湯之谷小（佐藤昭子）	58	6	準へ	公 孫 会
13	十日町市・東下組小（松原道子）	47	3	へ1	公 孫 会
14	東頸松代・儀明小（荒木耀子）	52	3	へ2	公 孫 会
15	東頸牧・原小（中村澄子）	54	5	へ1	公 孫 会

	学　校　名	年令	学級数	へき地級	貸 席 元
教頭　1	新潟市・両川中	50	6		ときわ会
2	村上市・村上養護	53	18		ときわ会
3	新津市・小合小	48	7		ときわ会
4	西蒲岩室・間瀬小	44	5		ときわ会
5	燕市・小池小	48	14		ときわ会
6	三島寺泊・夏戸小	43	6		公 孫 会
7	柏崎市・別俣小	46	4	へ1	公 孫 会
8	十日町市・野中小	52	3	へ2	ときわ会
9	中魚中里・倉俣小	45	6	へ1	公 孫 会
10	南魚塩沢・第一上田小	51	7		公 孫 会
11	上越市・中ノ俣小	49	1	へ4	公 孫 会
12	東頸大島・菖蒲小	44	3	へ2	公 孫 会
13	中頸板倉・筒方小	43	3	準へ	検 友 会

第6表　女性校長・教頭と貸席元の推移（1987－1991年）

		1987	1988	1989	1990	1991
女性校長	（総　計）	12	13	13	14	15
貸席元	ときわ会	6	7	7	7	8
	公孫会	6	6	6	7	7
女性教頭	（総　計）	9	9	9	11	13
貸席元	ときわ会	4	4	4	5	6
	公孫会	5	5	5	6	6
	検友会	0	0	0	0	1

「公孫会」駆け引きの「落としどころ」が「屈辱の派閥」である（本連載第十二回参照）「検友会」に押し付けられたものと考えられる。また女性管理職のポストは「検友会」とならんでへき地校および小規模校の比率が高い。とくに「公孫会」の「貸席」は校長、教頭ポストともその半数以上がへき地指定校である。

新潟県の女性校長は30年間でたったの四名の増
―岡山県ではここ四年間で約三倍（九→二十九名）に―

以上にのべた女性管理職の最近の微増傾向から、あるいは最近の女性の社会的進出の傾向から、あるいは男女平等の実現から、女性管理職の数は今後次第に増加するように思われる方もおられるかもしれない。しかし、これまで縷々明らかにしてきたような新潟県教育界の支配構造が続く限り、その予測には科学的根拠がない。すなわち、「派閥」はその「指定席」を私物化し、一席たりとも簡単には手放さないのである。

さて、新潟県の小学校に女性の校長が誕生したのは戦後の一九四六年三月のことであり、5名が発令された（本連載第4回参照）。中学校には女性校長はいまだかっていない。一九九一年現在、新潟県の小・中学校および養護学校の学校数の合計は約一〇〇〇校であるので、女性校長の比

第7表　　1962（昭37）年度における女性校長一覧

	学校名	学級数	氏名	年令
1	新潟市・笠木小	11	吉川シズ	56
2	長岡市・宮本小	10	渡辺ハリ	56
3	小千谷市・横浦小	3	篠田ミイ	55
4	上越市・有間川小	6	藤田カツヨ	57
5	五泉市・馬下小	6	田中トマ	55
6	豊栄市・早通小	6	能瀬ミサワ	49
7	東蒲津川町・津川西小	6	久保田コウ	56
8	北魚広神村・滝之又小	6	星野厚子	54
9	南魚六日町・大月小	3	宮島イトナ	54
10	刈羽刈羽村・高町小	6	倉重ハナ	52
11	西頸青梅町・須沢小	6	渡辺俊子	55

率は一・五%、女性教頭の比率は一・三%ということになる。新潟県では共働き教員の場合、トーチャンの校長昇任にともなって、カーチャンが退職の肩たたきをされる例が少なからずあるが、京都市では夫婦そろって中学校長という例がある。岡山県では一九八七年には新潟県と同様に女性管理職の比率は極めて低く、小学校の女性校長は9名、教頭は33名、中学校長はゼロ、教頭1名であった。しかし、岡山県議会ただ一人の女性県議（共産）などの奮闘によって、一九九一年には小学校の女性校長は28名に、教頭は80名に大幅に増加し、中学校長も1名誕生し、中学教頭も3名となった。

さて5名から出発した女性校長はその16年後の一九六二（昭三七）年には何名になっていたのであろうか。当時の女性校長の一覧を第7表に示すが、その数は十一名である。ということは一九九一年までのその後の30年間でたったの4名しか増加していないのである。これは新潟県の場合、管理職ポストが各「派閥」の「指定席」（すべて男性用）にされているために、「指定席」の撤廃、すなわち「派閥」の不当な公教育支配をやめさせなければ女性管理職ポストの増加はありえないことを事実で示している。「ときわ会」と「公孫会」は「派閥」支配を維持するために、「女教員会」にポストを「貸し与える」というやりかたによって「女教員会」を隷属させ、それをつうじてまともな運動を

封じこめてきた。「女教員会」がいかに無力であるかは歴史が証明している。「派閥」の不当なポスト支配をやめさせることは教育行政（県教育委員会）が直接責任を負っているが、それができないのであれば、県民の運動にねざして、情報公開や行政監査などの活用さらには法に訴えることや新潟県議会でも事実を徹底的に明らかにして追及することが必要であろう。

「派閥」においては女性差別が徹底している。そもそも「ときわ会」は女性の加入を認めていない。この点は「教育団体」の組織よりも暴力団の組織に類似している。「ときわ会」は自らを「趣旨に賛同するものは誰でも加入できる教育団体」などと自称しているが、これは大ウソである。女性はたとえ趣旨に「賛同」しても加入させないのであるから、「ときわ会」のいう「誰でも」には女性は含まれていない。「公孫会」は女性を加入させてはいるが、それは統制と集金と雑務のためであり、女性会員が管理職になる場合には、「公孫会」の「女教員会」に対する「貸席」として取り扱われる。また「新陽会」や「検友会」にも極少数の女性会員がいるが、それぞれの「指定席」を使って管理職になったためしはない。要するに、「派閥」はどのようなかたちであれ、女性教員にとって迷惑なものである。管理職になることだけが教員の「生きがい」ではないが、女性管理職が大幅に増加することは、新潟県の陰湿な「派閥」支配をやめさせ、県教育界における男尊女卑の風潮を一掃し、こどもや生徒にも男女平等を教員みずからが示す一つの手がかりとして極めて有益であると考えられる。

新教組本部四役経験者はすべて管理職に
―一九八一―一九八九年に組合役職を終えた「派閥」会員のその後―

新潟県の教職員組合運動にも「派閥」があからさまな干渉を行っていることはこれまで何回も述べてきた。たとえインフォーマルな組織であっても「派閥」という実質的な権力システムが教職員組合活動に干渉することは不当労働行為である。

さて、組合「派閥御用組合派」（「同志会」）から「派閥」の了解と調整のもとに役員選挙に立候補し、とりわけ新教組本部四役（委員長・副委員長・書記長・書記次長）になった「派閥」会員には管理職ポストが約束されている。一九九一年の異動で、一九八一年三月から一九八九年三月の間に新教組四役の役職を終えた「派閥」会員は第8表に示すように全員が管理職になった。一般論からいえば、組合役員が管理職になるのは必ずしも悪いことではないが、新潟県の場合には一般論は通用しない。かれらははじめから「派閥」（「ときわ会」または「公孫会」）の使者として、将

来の管理職ポストをえさにされて、組合役員を引き受け、「派閥合意」の組合運動を行っているのである。「もうすぐ管理職になれる」というのが彼らの組合活動の「エネルギー源」である。管理職になれば、彼らがかって新教組本部の「組合幹部」であったなどということは日頃の言動や行動からは職場の教員にも想像できず、本人も酒席と「派閥」の経歴書に記載する以外にはそのことを語りたがらないのが常態である。第8表にはこれらの該当者のその後の経歴を示した。ここには「派閥」の権力の行使とは何であるのか、その一端がよく示されている。

（つづく）

第8表　新潟県教組（新教組）本部四役の退任後の管理職昇任
（1981－1989年退任者）

（○印は「ときわ会」，●印は「公孫会」の「指定席」を示す）

委員長	M委員長	（1981.3退任）（ときわ会） 1983.4　○三島・与板中教頭 1985.4　○長岡・南中教頭 1987.4　○燕・小池中校長 1989.4　○加茂市学校教育課長
	I委員長	（1984.3退任）（公孫会） 1985.4　●上越・直江津中教頭 1988.4　●糸魚川・浦本小校長 1990.4　●中頸・三和中校長
	I委員長	（1986.3退任）（ときわ会） 1989.4　○南蒲・中之島中教頭
	K委員長	（1989.3退任）（公孫会） 1991.4　●新井・新井中教頭
副委員長	H副委員長	（1984.3退任）（ときわ会） 1989.4　○北蒲・乙中教頭
	M副委員長	（1987.3退任）（公孫会） 1989.4　●栃尾・東谷小教頭

（第８表つづき）

書記長	Ｔ書記長	（1981.3退任）（公孫会） 1983.4 ●小千谷・東小千谷小教頭 1986.4 ●十日町・真田小校長 1987.4 ●十日町市教委指導管理主事 1988.4 ●十日町市教委学校教育課長 1989.4 ●長岡・栖吉小校長 1991.4 ●小千谷・東小千谷小校長
	Ｔ書記長	（1983.3退任）（ときわ会） 1987.4 ○北蒲・中川小教頭 1990.4 ○村上・村上小教頭
	Ｋ書記長	（1985.3退任）（公孫会） 1989.4 ●南魚・塩沢小教頭 1991.4 ●長岡・上組小教頭
	Ｓ書記長	（1987.3退任）（ときわ会） 1989.4 ○五泉・川東中教頭
	Ｗ書記長	（1989.3退任）（公孫会） 1991.4 ●長岡・四郎丸小教頭
書記次長	Ｙ書記次長	（1983.3退任）（公孫会） 1986.4 ●中頸・竹直小教頭 1989.4 ●新井・新井南小教頭 1991.4 ●西頸・木浦小校長
	Ｗ書記次長	（1986.3退任）（ときわ会） 1991.3 ○加茂・若宮中教頭
	Ｎ書記次長	（1989.3退任）（ときわ会） 1991.4 ○栃尾・栃尾南小教頭